

愛和の里広報誌 増刊号

合同防災訓練 「田代小学校×愛和の里」

令和7年12月23日 発行



愛和の里では地域の防災訓練、行事にも参加しています！



これからも、子ども × 高齢者 × 地域。
その温かなつながいを、未来へと広げていきます。



顔が見える関係を力にし、安心を確かめ合った日

— 子どもと高齢者が共に取り組んだ合同防災訓練 —

今回の合同防災訓練は、建物内の避難行動に加え、子どもたちとご入居者が「大丈夫ですよ」「安心してください」と声を掛け合い、共に過ごす時間を大切に実施しました。

災害時に誰もが抱えるであろう不安を、年齢を超えた支え合いで和らげること——それが、私たちが最も重視した視点です。

この取り組みは、私が毎朝続けている登校班の見守りパトロールで生まれたご縁がきっかけでした。

4年間で3人の校長先生が着任される中、栗根校長の温かいご理解と後押しにより、ようやく形にすることができました。地域とのつながりを丁寧に続けてきたからこそ実現した取り組みだと感じています。

顔が見える関係は確かに大切ですが、実はそれだけですと十分ではありません。その関係を、いざという時に連携できる「仕組み」として整えてこそ、本当の力になります。今回の訓練は、築いてきた関係を実践につなげる一歩でもありました。

田代小学校は、日頃から愛和の里との交流を大切にしてくださっています。同じ地域で暮らす仲間として触れ合うことで、「困ったときは近くに助けてくれる人がいる」という安心を、子どもたちもご入居者も実感できる一日になりました。

また、この取り組みは防災訓練にとどまらず、インクルーシブな学びとしても大きな意味を持っています。

高齢者との自然な関わりは、子どもたちの将来や家庭での会話へと広がり、地域の福祉を支える土台づくりにもつながっていきます。

当日は、児童・教職員・施設職員・ご入居者が一体となり、地域がひとつになる場面が何度も見られました。

人と人の関係が、仕組みとして機能することで、命を守り合う力になる——その手応えを感じる一日となりました。

本広報誌では、準備から当日までの歩みを写真とともに振り返ります。

巻末には、校長×施設長による対談も掲載しています。

田代小学校と愛和の里は、これからも「子どもたちの経験が地域の未来をつくる」という思いを大切に、支え合える地域づくりを続けてまいります。

ご協力いただきました皆様に、改めて感謝申し上げます。

10月1日～：担当者協議

校長・施設長を含めた初回～最終協議
(田代小と愛和の里とを行き来して)

児童に地域を支える力を付けたいという思いを確認
合同訓練に向けて方向性を共有



10月20日：児童による愛和の里防災見学

何度も来ている愛和の里ですが、命を守る「防災」については表情が違う(真剣に説明を聞く児童3.4年生)



11月4日:田代小学校へ防災出前授業

愛和の里職員による高齢者を守るための防災授業
「命を守る行動とは？」児童の目がまっすぐ向く」



11月8日:ふれあいレクリエーション

ゲームや交流を通じて、子どもと高齢者の距離がぐっと縮まった。「またね！」自然に交わされる笑顔と笑顔。



11月19日:厚愛地区教育研究会



厚愛地区の先生方に、地域防災の実情を伝える田代小先生と愛和の里防災担当者

12月1日:合同防災訓練(本番)

避難行動(車いす介助)に挑戦する児童。真剣な表情が頼もしい。
児童が高齢者へ優しく声をかける姿が、施設全体を温かい空気に。



緊張感の後に自然と出る笑顔が、本訓練の重視した視点
地震が起きてから収まるまで共に手を取り合い安心しあう様子

子どもたちのやさしい声が、安心をつないだ日

－ 田代小学校 × 愛和の里 合同防災訓練 振り返り対談 －

■ はじめに

今回の合同防災訓練は、単なる避難行動の確認にとどまらず、田代小学校の児童と愛和の里のご入居者が、互いに関わり合いながら「安心を守るとはどういうことか」を考える、特別な機会となりました。

訓練後には、田代小学校の栗根幸子校長と、愛和の里の林政信施設長が振り返りの対談を行い、子どもたちの姿から見えた学びや、地域防災の新しい可能性について語り合いました。

■ 「子どもたちのやさしい声が、安心をつないだ日」

【林施設長】

今回の合同訓練では、子どもたちがご入居者のそばに自然と寄り添い、「大丈夫ですよ」「ゆっくりでいいですよ」と声をかけてくれました。その一言で、ご入居者の表情がふっと和らぐ瞬間を、何度も目にしました。避難経路を確認するだけであれば訓練としていつでもできます。しかし、相手の不安を受け止め、安心を手渡す行動は、決して簡単なことではありません。特に印象的だったのは、子どもたちが自ら考え、ご入居者のそばに行き、「安心してください」と声をかけていた場面です。

大人より先に「安心を守る行動」を実践していたことに、驚かされました。

【栗根校長】

今回の姿は、訓練の場面だけで生まれたものではなく、これまでの普段の関わりがあってこそだと感じています。

学校の中で行う防災訓練では、どうしても「自分の身を守ること」が中心になりがちです。しかし今回は、状況の異なる方と実際に触れ合うことで、「相手の安心を考える」という価値を、子どもたち自身が見いだしていました。その姿が、とても印象に残りました。

■ 「助ける側・助けられる側」を越えて、安心を共有する関係へ

【林施設長】

災害時には、「助ける側」「助けられる側」という区別は、あまり意味を持たなくなります。その場にいる人同士が、相手を思い合い、支え合えるかどうか、本当の防災力だと思います。

訓練では、子どもたちがそばにすることで、ご入居者が喜び、笑顔になっていく様子がはっきりと伝わってきました。

【栗根校長】

子どもたちは、「自分たちがここにいることで、お年寄りが喜んでくれる」「笑顔になってくれる」ということを、授業とは別の形で、肌で感じるができたと思います。声かけの言葉一つひとつを真剣に考えていたことも印象的でした。先生たちに見守られている学校の中ではなかなか見られない、「今、自分たちに何ができるだろうか」と主体的に考える姿が、多く見られた訓練でした。

■ 地域だからこそ育てられる「安心の文化」

【林施設長】

学校と高齢者福祉施設が連携して防災訓練を行える地域は、それほど多くはないと思います。

しかし、同じ町で暮らす子どもと高齢者が顔の見える関係になることで、「災害時は地域で支え合う」という意識が、自然と育っていくのだと思います。

【栗根校長】

子どもを育てるということは、学校の中だけで完結するものではありません。外に出て、地域の皆さんに育てられていると実感すること自体に、大きな意味があります。

今回の訓練は、教育と福祉が特別なものとして分かれているのではなく、自然につながっていることを、子どもたち自身が感じられる機会になりました。そうした体験は、結果としてキャリア教育にもつながっていると感じています。

■ 次年度に向けて

【林施設長】

今回の訓練で、子どもたちの力が想像以上に大きいことが分かりました。来年度は、もう一步踏み込んで、ご入居者と子どもたちが一緒に取り組む共同作業を取り入れてみたいですね。例えば、避難グッズの確認など、小さなミッションを設けることも考えられます。今回は「安心を確かめ合う」訓練だとすれば、次回は「安心を一緒につくる」訓練にしていけたらいいと思います。

【栗根校長】

とても良い取り組みだと思います。子どもたちにとって、「自分が役に立てた」という実感は、大きな成長につながります。一回きりで終わらせるのではなく、次年度以降も継続していくことで、学びはさらに深まっていくはずですね。

■ おわりに

防災訓練という枠を越え、「どうすれば相手が安心できるのか」を子どもたちと共に考えた一日。

田代小学校と愛和の里の連携は、地域が持つ力を改めて実感させてくれるとともに、「安心の文化」を育てていく大切な一歩となりました。

